地域密着型インターンシップ研修　最終報告

９期生　よし

◆研修目的

①今、見ておくべき国は日本！！

東日本大震災が起こった 2011.03.11。学生時代中にしかできないことを、と思い長期休暇を海外一人旅に費やすことが当たり前となっていた私はその時、ボリビアにいた。現地の人に「日本が大変なことになっている。」と聞かされ初めて日本で起きていることを知り、その後、現地テレビで津波の映像を見て、衝撃を受けたことは今でも覚えている。海外でも、日本の大震災がトップニュースに取り上げられ、その後行く先々で、「お前は大丈夫だったのか？日本にいたのか?」「家族は大丈夫だったのか？」と尋ねられ、地球の反対側でもみんなが日本のことを心配している様子だった。

②大熊町の地域復興

先学期、「地域発展協力論」という授業で、東日本大震災の被災者をいかにしてサポートしていくか、という課題がグループ別に与えられた。

援助対象地域・内容など自由に決めていいということだったが、私たちのグループは東北沿岸地域でも特に第一原発のある福島県大熊町を対象地域と定め、受け入れ施設先でどうコミュニティを壊さずして暮らしていくかについて、議論した。授業の中で素材広場研修生の先輩が、沿岸部や会津の現状について話に来てくださったこともこの事業を知るきっかけとなる。

⇒　現場の実状を肌で感じ、把握したい！！

◆研修内容

Ⅰ．会津産商品の物販

Ⅱ．粟島訪問

Ⅲ．仮設住宅訪問（カラオケ巡回バス・料理教室開催）

Ⅳ．会津地鶏みしまや

Ⅴ．農業体験　簗田さん宅

Ⅵ．　渡部柿園農家

Ⅶ．　会津復興モニターツアー

Ⅷ．　相馬市訪問

Ⅰ．会津産商品の物販　（8/27,8/28）

場所：新潟県古町

目的：

① 風評被害で大打撃を受けている福島県産食品業界の商品を県外の方にその安全性を広く知ってもらう。

② 売上金は、いわき市四倉漁港近くで水産物加工業を営むニイダヤ水産に真空器をプレゼントする為に使われる。目標金額 30 万！！（新潟大学と折半）
東日本大震災で、ニイダヤさんは壊滅的な被害を受け、現在営業をしていない状況。
ニイダヤさんは伝統的な技術で加工を営んでおり、その技術は継承していく価値のあるもの。地域雇用創造にもつながり、地域全体の活性化のためにも、ニイダヤさんにもう一度頑張ってもらおう！という「ニイダヤ水産復興プロジェクト」につながる。

活動内容：
商品のセールス・物販報告書作成・売上額、仕入額の整理

気づき：
足を止めてくださる方は、買い物帰りの年配の主婦の方が多く、福島出身の方や親戚が福島在住などの理由で、震災復興を応援する意味で購入される方も多かった。気温が高かった事もあり、天然炭酸水 aQaizu や会津の雪ヨーグルトなどの飲料も他の商品と共に買っていかれる方もいた。新潟県は福島から近いこともあり、お客様から福島の商品に対する心配の声は少なかった。自身としては、商品知識が乏しく、上手く説明できなかった。大きな声で売り込む事で、お客様に足を止めてもらい、一人一人に対してコミュニケーションを図る事で、福島県産の商品を知ってもらえるように説明をすることが大切。またリピーターの方も少なからずいて、今後も新たなお客様に商品を試して頂くことで、更なるリピーターを獲得する事が重要。セールスの難しさを実感。

Ⅱ．粟島訪問　(9/14)

場所：粟島浦村

目的：ニイダヤ復興プロジェクト始動に向けての粟島視察

活動内容：加工場見学、ニイダヤ復興プロジェクト打ち合わせ

粟島は佐渡島の近くにある島民 300 人程の小さな島で、釣り人のメッカとも言われる漁場資源の豊富な所。今回、訪問した理由は、震災で加工業の営業を続ける事が難しくなったニイダヤ水産さんの新しい販路を探すための視察。福島県太平洋側は震災後、放射能の影響で、漁業のイメージが悪く、魚もあまり水揚げされていない。そこで、日本海側の魚を仕入れればいいのではないか、ということで、粟島を訪問した。
島唯一の加工場には、立派な設備が整えられているが、加工技術をもつ人手不足が原因で、現在は十分に利用されていない、とのこと。現場の視察が終わると、粟島の方も含め、ニイダヤ復興プロジェクトの旗揚げとも言える初ミーティングに参加。粟島加工場の現状・ニイダヤ水産の現状・両者の課題について、全体で情報共有。プロジェクト始動の第 I 歩の現場に同席できた事は貴重な経験となった。観光プロデューサーとして両者のつなぎ役を果たす横田さんの仕事ぶりに圧巻。

Ⅲ．仮設住宅訪問

場所：東部公園仮設住宅（50 戸）

現状：・大熊町の人々約 4300 人が仮設住宅（500 世帯）
・会津若松市内に仮設住宅が点在
・一次避難所；体育館、公民館（3 週間）　→　二次避難所；旅館、ホテル（3 か月）
→　仮設住宅（7/15 から）
・東山温泉での受け入れ者数：約 470 名

内容：
①　料理教室　(9/12)

目的：私たち研修生は県外出身者がほとんどであり、会津や大熊町のことを十分に知ることができていない。会津や、震災のあった浜通りなど含め、福島全体の知識を深める一環として、大熊町の方々に県の事について教えて頂ける機会をつくりたい、という思いで立ち上げたもの。第一回目は、私達研修生と料理の得意なお母さんが集まって、少人数で試験的に行った。今後の展望としては、会津若松市内の方々も含めて交流の場にしていきたい。

② カラオケ巡回バス

目的：福島県社交飲食業生活衛生同業組合主催で県内各地の仮設住宅に無料でカラオケ巡回バスを連行するプロジェクト。復興のためには、まず元気が必要、ということで入居の被災者に楽しく歌って元気になってもらおう、という目的。費用は厚生労働省の補助金を活用。

活動内容：

料理教室レター作成・料理教室告知

ヒアリング内容

大熊町の行政区は 9 つあり、仮設住宅に移る際に行政区ごとにくじ引きでどこの仮設住宅に入るかを決定した。なので、現在の仮設住宅では、集落ごとに移り住んできており、仮設住宅の中では、知り合い同士が多い。一方、8/26 に自治会長が決まったばかりで、ひとつのコミュニティとして動いていくのはこれからかもしれないが、現在のところ、みんなが集まる場はない、とのこと。また、「1 番困っていることは？」と尋ねたところ、「1 日を通してやることがない。」との答えが多かった。カラオケ巡回バスや料理教室を通じて、まずは大熊町の方が集まる場ができ、さらに私達外部者も参加することで、交流を図れることができたらよい。

また、大熊町が会津若松市内で孤立しているという現状も考える必要がある。今後、10 年、20 年と大熊町に戻れない可能性があることを考えると、大熊町の方々・会津若松市内の方々、双方が違和感を感じている状況は改善されなければいかないと感じた。今は試験的段階だが、料理教室やカラオケ巡回バスを開催するにあたり、今後は仮設住宅の周りの住民の方々にも声をかけていってもいいのではないか。

Ⅳ．会津地鶏みしまや （9/3,9/4,9/15）

場所：三島町

会津地鶏の飼育から処理・販売まで全てを手作業で行っている。

会津地鶏とは…

鶏舎：

JAS(日本農林規格)で「地鶏」と呼べる飼育基準は１㎡当たり 10 羽以下だが、三島町産会津地鶏は１㎡当たり約４羽と半分以下の基準で飼育。自由に動き回れる環境（平飼い）で飼育するため、ブロイラーと比べ、肉質が引き締まり、歯ごたえがある。

飼育日数：

通常ブロイラーの場合、50-60 日で出荷段階まで飼育されるが、会津地鶏の場合は 120 日～140 日かけて飼育される。

飼料：

特に飼料の配合バランスに関して気を遣っている様で、福島県内の野菜残滓も使用している。会津産の飼料米も使用していて、地産地消を推進。

活動内容：

鶏舎掃除・鶏舎の消毒・もみがら敷き・出荷用地鶏の捕獲・美坂高原見学・加工場見学

鶏舎掃除・鶏舎の消毒・もみがら敷き：

飼育・処理・販売という流れの中の、飼育の現場（鶏舎）での作業。みしまやさんでは、４つの鶏舎を所有しており地鶏の成長に合わせハウスを移す。今回は、新しい雛を迎えるに当たっての、準備段階。まずは、鶏舎掃除。１ヶ月前に本当に掃除したのか、と疑う程のほこり。地面から壁から天井まで、ほこりがクモの巣状になっていて、天井のほこりをほうきではたくと、目も開けられない程。掃除が終わると、鶏舎の消毒。消石灰を鶏舎全体と周りに撒いていき、ウイルスの侵入を防ぐ。最後にもみがらを敷いてエサ箱を設置して雛を受け入れる準備態勢が整った。印象としては、まさに肉体労働。

美坂高原見学：山頂付近にある高原は以前はレジャー施設として利用されていたが、現在は開店休業中の状態。現在は、一部を畑にして、白菜やとうもろこしが栽培されている。みしまやさんでは、その一角に鶏糞を運び、一年間発酵させることで肥料をつくり、できた有機肥料を畑の堆肥としている。そして、また、畑でできた野菜の残渣は、地鶏の飼料に混ぜられ、まさに資源循環型の経営が行なわれている。

地鶏の捕獲：最初は逃げられてばかりで、作業に慣れるまでが大変。この鶏が日頃、スーパーなどで見かける鳥肉なのか、と考えながら黙々と地鶏を捕まえた。

今日の日本では、生産と消費の距離が物理的にも精神的にも乖離している状況にあるような気がする。生産段階では屠畜や加工はオートメーション化され機械的に流れ、消費者においては、食はパッケージ化され、簡単に手にはいるかの様に目の前にあらわれる。みしまやさんのように、飼育から販売までを全て手作業で行っている会社は少ないので、それ

を活かし地元の小中学生に食育事業を行ったり、地域でできる取り組みに繋げられるのではないか。

社長さんの話：
口蹄疫・鳥インフルエンザ・最近では、ユッケの食中毒事件など、畜産業界は何かと騒がれている。やはり、そのたびに影響が出るようで売り上げも落ちる。今回の大震災で、観光客が激減することで、お宿さんからの発注が減少し、震災後は県内の売り上げが減少。また、飼料を発注していた東北沿岸部の会社が被災し、発注先を変更せざるを得なかったという状況も。直接的に被害を被った方々がメディアでは取り上げられているが、間接的に被害を受けている方々もたくさんいることを実感した。みしまやさんでは、震災後、食の安全性を県外の方に知ってもらうために、大阪や東京などに出向き、精力的に物販に取り組んでいる。この 1 年は継続して行う様子。また微生物研究所に食肉の調査を依頼しており、結果を自社 HP に載せるなど自社商品の安全性のアピールに努力している。食の安心安全性に尽力している。

Ｖ．農業体験　簗田さん宅　（9/7,9/8,9/9,9/21,9/22）

場所：高久下町

活動内容：白菜の苗植え・枝豆の収穫・枝豆の機械選別・枝豆のパック詰め・メロン畑の後片付け・雑草抜き・ナス、ピーマンの収穫・ナス、ピーマンのパック詰め

農家さんでも、お母さんの話から震災の影響が垣間見えた。震災後、福島県の農産物は出荷制限がかかり、全く出荷できない状態が続いた。作物はあるのに、出荷できないというもどかしい状態で、そうなると、農家さんの収入もゼロ。現在は、制限も解かれているが、出荷前に残留放射線値を調べなければいけないとのこと。会津は福島県の中でも内陸の方に位置し、原発からは 100 キロも離れている。大気中の放射線値は 0.13 マイクロシーベルト/時。ほとんど東京などと変わらない数値。しかし、県外や海外からは、福島県産農産物の安全性が懸念されている状況がある。
福島県としては、食の安全性を広く周知していくことが喫緊の課題だが、農家さん自身、個人ではどうにもならないもの。人々の意識の変化を生み出すにはどのような取り組みを講ずるべきなのか、考えていくべき。

VI. 渡部柿園農家（9/10,9/13）

場所：会津若松市門田町

活動内容：倉庫の整理・反射シート敷き

倉庫の整理：

今年度 10 月末に柿の収穫を迎えるにあたっての準備段階。倉庫いっぱいの先年度の出荷用の段ボールを移動させて、今年度用の新しい段ボールのスペースを確保。消費者は段ボールにきれいに詰められた柿しか目にする事はないが、生産者は柿の収穫など、農作物に直接関する作業以外にも、細々とした作業があることを実感。例えば、出荷用の段ボール１つ作るにも、外箱に内箱をはめ込み、新聞紙を敷き、柿を固定するトレーをいれるという作業がある。それを全て手作業で、何千個と作るのは大変な労力。

反射シート敷き：

柿園に反射シートを敷き、風で飛ばないように、ピンを打ち込んでいくという作業。収穫まで一ヶ月と迫ったこの時期に、下枝に実っている柿への日射量が少ないと、出荷段階まで変色しない。反射シートを敷く事で低い位置にある柿まで日が当たるようになる。

昔から柿園農家を営み、広大な敷地を持つ渡部さん家でも、６月の芽かきの時期に人手が足らず、全ての木に手を入れることはできない、とのこと。柿の木はたくさんあるのに、もったいない気がした。耕作放棄地が年々、増大している事がまさに日本農業の問題として、この現状をあらわしている。家族経営などの小規模経営体が多い日本では、土地を持て余す農家さんも多いのだろう。農業の今後の大きな指針として、大規模集約化がうたわれている。しかし、儲かる、儲からない以前に、昔からの自分達の土地を守るという意味

で続けているという農家さんも多い。どのようにして、行政と生産者が今後合意を形成していくか、難しい問題だと感じた。

Ⅶ. 会津復興モニターツアー　(9/17.9/18)

目的：
東京のメディア関係者の方々に、会津の農家さんが風評被害に対してどのように取り組んでいるか、会津が観光復興するために向けてどう取り組んでいくか、を知って頂き、会津の魅力と現状について告知してもらうことが目的。

活動内容：事前準備のお手伝い（生産者 POP の作成、ディナー会受付リスト作成）
原瀧での会場設営・料理の盛り付け（１日目）
朝食会場、BBQ 会場設営（２日目）

感想と気付き：
事前準備の段階では、リーダーに振られる細々とした作業を担当。生産者 POP の作成に関しては、作業を進めていく前の段階での報告の重要性に改めて気付かされた。１日目の夕食会では、事前に研修生の担当も決まっていたものの、お客様も入り混じっての会場では、個人個人が臨機応変な対応が求められた、と思う。事前準備も入念に行われていたが、計画通りにお客様をもてなす側としての苦労を実感。

Ⅷ. 土湯温泉・相馬市訪問

目的：中通り・浜通りの被害状況を視察

感想と気付き：
会津若松では全く感じる事のなかった震災の物理的被害も、福島市に近づいていくと徐々に現れてきた。道路が未だに崩れている箇所や復旧工事が行われている場所が今でもあり、中通りでも、震災時は相当に揺れたことが伺え知れた。土湯温泉は清流の流れる渓谷沿いに位置し、自然豊かなところ。旅館やホテルもたくさんあったが、実際に現在営業しているお宿さんは 10 件程。三連休もほとんど観光客は来なかったよう。土湯温泉しかり、柳津温泉しかり、福島には小さな温泉街がたくさん存在するので、その中で、どう差別化を図っていくかが重要。震災の影響で建物が崩壊し、復旧の目処もたっていない旅館さんも目にした。初めて見る震災の物理的影響は何ともいえないものだった。
沿岸部は、道路上はきれいにはなっているとはいえ、震災の被害がまざまざと残っていた。

空き地に集められた見るも無惨な廃車の山。斜めに傾いた家屋。壁の大部分がはがれて中が丸見えになっている倉庫。人手が足らず、片付けの目処もたってないのだろうか。震災発生から半年経った今でも、実際に直撃を受けた現場を目にすると今回の被害の規模が思い知らされる。訪れたのは沿岸部のほんの一角だが、自分の目で確認することはまたテレビや新聞で情報を得るのとは違うもので、この１ヶ月で実際に見に行く事が出来てよかった。

◆まとめ

仮設住宅で大熊町の方々、農家さんやみしまやさんに行く事で会津の方々の話を伺うことができた。その中で、特に問題として感じたのは 2 点。一つ目は、会津若松と大熊町の軋轢に関して。二点目は、生産者への間接的な被害。一点目に関しては、今後も料理教室を継続的に行う事で、地域の輪を広げていく。私達、外部の者は、イベントを提案したり、住民が集まるきっかけづくりしかできないが、そのきっかけづくりが重要なのではないか。二点目は非常に難しい問題。数字的には安全である事は確かなので、放射線値測定結果を逐一更新して、公表していくなどの地道な努力が必要だと、感じた。今回、直接的な被害を被った被災者の支援を目的とする地域コミュニティ復興を希望してこのインターンシップに参加したが、生産者さんの方が見えない被害に苦しんでいるのではないか、と感じた。補助金についても農協を通して国に対して交渉中で、具体的な内容はまだ決まっていない。農家さん自身、補助金にあまり期待はしていないようだが、肥料や苗など投入資金ぐらいは返ってきて欲しい、という本音ももらしていた。さらに観光客減少という事態が、宿泊客減少→お宿さんからの発注減少、というサイクルで第一次産業にまで影響を及ぼしている、という現状もある。

今後、少なくとも１年半は農学部に在籍し、第１次産業について学んでいく自身にとって、この１ヶ月で様々な生産者にお世話になり、日頃の学習と現場を照らし合わせるいい機会になったと思う。